

さらなる「人間」と「社会」、「福祉」への視点を

—人間福祉学部として—

人間福祉学部長 室 田 保 夫

現在「貧困」の問題が再浮上している。バブル時代から 20 世紀末において日本では貧困は克服されたかのような議論が浮上したが、21 世紀に入り「貧困」「格差社会」「難民」という言葉が流布した。そして「こどもの貧困」「女性の貧困」「介護難民」というような言葉や状況も生まれている。言葉は時代を映す鏡でもある。福祉の歴史を瞥見しても、明治期以来の「下層社会」という言葉や「スラム（貧民窟）」「底辺」「暗黒」といった言葉にも時代と状況が表われている。近代国家、福祉国家といって表面的に着飾っていても、その影には「貧困」を軸にした社会問題、生活問題は消えることはない。

福田徳三という人物がいる。彼は大正期に「生存権の社会政策」という論文を発表したことでも有名である。戦後日本国憲法においては、25 条に有名な生存権保障が謳われ、また朝日訴訟は「人間裁判」とも評された。今、こうした状況の中で、生活保護の課題も再浮上している。福田の思想は戦後の、新憲法、そして今日の生存権の危機状況とも連なる。

今年は阪神淡路大震災から丁度 20 年の節目の年でもある。多くの記念行事が行われたが、表面的な街並みや外見からだけでは、その復興が成就したとは言えない。また東日本大震災から 4 年目を迎えた。東日本大震災の復興は、福島原発の問題とも連動し、「道遠し」の状況である。先の福田徳三は関東大震災の時、後藤新平の復興策に対し「人間の復興」と説いたことでも有名である。福田の論じる「人間の復興」とは、人々の日々の生活を支えていく「生存権」を意味し、それは先の「生存権の社会政策」とも関連する。

被災した人の心痛は多くの事情において様々である。それを理解することは難しい。しかしそれは語れない、語りたくない状況がある。まさにこうした体験は沈黙か若しくは自己にしか分らない閉じられた領域である。しかし、対策も復興もここが原点である。そしていわば自然災害が何を映し出したかという、それは現代の状況である。その意味で何物にも代えがたい現代文明の先生でもある。さらに今年は「戦後 70 年」という節目の年でもある。「戦争の記憶」も決して風化させてはならない。「記憶」を言葉に残して後世に伝えていくことはきわめて重要な仕事である。阪神淡路大震災や東日本大震災においても、そうした取り組みが行われている。そこには生きている人間を中心に据えていく必要がある。それは歴史的には生活や生存を歴史の中に置く発想につながっていくし、人間を根本的に研究していくという方法とも連動する。

昨年、関学は 125 周年の節目を迎えた。節目は過去を振り返り未来を見据える鍵となる。関学はキリスト教主義と世界市民を重要な柱としている。「人間」と「福祉」を根底から取り組んでいこうとする本学部も 2018 年 4 月には満 10 周年を迎える。本学の不易のミッション、そして学部のミッションを如何に生かしていくか。各自が学問的良心に沿って不断に問うていかなければならない。